

◆特集 情報収集・活用術◆

情報について思う事

寺田 総一郎

この情報過多時代の中で、文献収集などの情報を得ることは比較的簡単である。具体的には、英語、日本語に分けキーワードから検索するわけだが、問題はそのソースと得られた情報の選択にある。すなわち、ソースの問題として既に集積された論分データがかたよっていたり、また、自分が選択したキーワードが適当であるかどうか、そしてそれが正しく理解されているか、さらに論文の主たる内容を示すキーワードがデータとして正しく入力されているかが問題となる。その後、検索で得られた文献を選択検討するわけだが、余りにも見当違いの文献がコンピューター上で表示される経験はだれでもあろう。その原因として、キーワードの設定やソフト側が正しく判断できていないという問題がある。近い将来ソフトが進化を遂げ、思考能力をつければ皆無ではないにしても、その問題は減少する可能性がある。

医学に関する情報は膨大で、その中で真に重要で正確な情報を読み取るのはきわめて困難な作業である。たとえば、近年見直された消化器病学の分野における *Helicobacter pylori* (以下 *H.pylori*) の問題など著名な例であろう¹⁾。1800年代後半より、胃の粘液層中に細菌が認められることが病理学者により発表されていたが、高名な学者によりそれは否定され、オーストラリアの Warren と Marshall によって再確

認されるまでに実に約80年を要した。その間、胃の *H.pylori* 感染症に関する実態の解明は遅れ、現在では周知となっている *H.pylori* が慢性胃炎や胃潰瘍の原因であるという事象も長い間無視され続けられた。今日では、*H.pylori* の除菌さえも popular になってきた。ふりかえれば歪んだ視点で混乱した学説論争が行われてきたことになる。その原因の一つとして、粘液層の実態を解明せずに、ただ胃は強酸であるから細菌など増殖するわけがないという誤った情報(迷信)の発信から始まっている。頑迷な固定観念から生じた問題ともいえよう。しかし、そのような情報の混乱は何も医学の分野に限らず、一般社会たとえば災害情報の伝達にしても日常茶飯事に起こっているのではないか。医学や災害などの情報の伝達に関しては、しばしば、その誤解が致命的になりうる。したがって、その誤りの是正はきわめて重要であり、見過ごせない問題である。人間同士の情報コミュニケーションには限界があるが、それを是正する努力と検討は常に必要である。

巷には、多くの情報に関する啓蒙書が氾濫しているが、皮肉なことにそれが情報の混乱をより助長している可能性がある。そのような啓蒙書を完全に理解できる読者はきわめて少数であり、逆に完全に理解できる少数の読者にとって情報に関する啓蒙書など必要ではないだろう。要は、自分に合った言い換えれば自分に可能な情報の取捨選択を行えばよいのではないか。医学の研究に関しては情報にこだわり過ぎると、検索に惑わされ、研究の本質から外れ

TERADA Soichiro

浜松赤十字病院 内科

originality の消失につながることは先人の教えである。したがって、この情報過多時代に、多くの論文集やデータの中から本質をつかみとるという情報を収集活用する側の修練や研鑽こそがより重要であろう。

浜松赤十字病院図書室は、24 時間開放されており、時間の制約のない不断の臨床事象に対応できるようになっている。最新のコンピューターもインターネットを利用した文献検索も含め 24 時間利用可能である。患者図書館 (図 1) も月に 3 回時間を決めて病院の一室を開放し患者さんの健康増進の手助けをしており、好評で



図1 患者図書館の様子

ある。今後、図書室としては簡便で helpful な情報ネットワークや近未来に可能であると思われるより完全な形での音声対応による英語、日本語による文献検索などの情報収集と活用に関心と期待を持っている。

参考文献

- 1) 寺田総一郎：シリーズ・がんで死なないために(23)胃がん Part 2 胃がんとピロリ気になる関係. ヘルシスト 1996 ; 20(6) : 26-30.